

## 2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部	教授	宮本佳範
最終学歴	学位	専門分野
名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程	博士（人間文化）	社会学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

専門的知識はもちろん、幅広い教養および社会人として広く求められる力を育成する。

##### 【目標】

観光に興味を持つ学生（特に観光実務士プログラムを意識して受講している学生）に対しては、観光に関する専門的な知識を教授するとともに、興味を深め、現実の問題を考察する能力を育成する。また、その他の学生については、観光を題材としつつ、幅広い教養およびジェネリックスキルの育成を目標とする。

##### 【方針】

学外連携の機会を重視するとともに、講義科目でもアクティブラーニングを重視し、教育効果を高める。

##### 【計画（方法）】

ゼミでは、JR 東海バスとの連携企画を中心に、外部のコンテストへの参加を目標とすることで、学生のモチベーションを高めていく。講義では観光に関する内容から様々な分野へ話を広げ、一般教養に関する学生への発問などを多く取り入れる。それにより、学生の授業への主体的参加、学生自身が考える機会の創出につなげ、集中力と理解の増進を図る。特に3・4年生向けの応用系の講義科目では、グループワークや学生による発表などの機会を積極的に取り入れた授業を展開する。

#### ○担当科目（前期・後期）

##### （前期）

専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、観光マネジメント（観光・サービス概論）、総合演習Ⅰ、地域観光論、観光資源探求

##### （後期）

現代観光論、レジャー産業論、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、総合演習Ⅱ、観光ビジネス論（観光学）、

#### ○教育方法の実践

講義科目である、地域観光論、現代観光論、レジャー産業論、観光資源探求などで、授業の一部にグループワークや発表を取り入れることで、学生の主体性を高めるよう努めた。また、観光の授業のなかで、専門的な知識の伝達だけでなく、教養や表現力などの汎用的な能力を高めることを意識した教育実践を行った。

演習科目では、観光を題材としてジェネリックスキルの育成に努めた。具体的には、まず、2年生のゼミでは、これまでと同じくJAF主催の「あいち学生ドライブスタンプラリーコンテスト」に

取り組んだ。その結果、1チームは8月に開催されたコンテストの本番に進むことができた。3年生のゼミ(+4年の有志)では、JR東海バスと連携したバスツアープロジェクトを実施した。今年度は、春日井の産業を応援するコースと、岐阜県八百津町のダムや産業を巡るコースの2種類企画し、実施した。こういった活動を通して、学生たちは実際の顧客を意識し、商品を作っていくプロセスを学ぶことができた。

#### ○作成した教科書・教材

例年通りであるが、観光学および観光マネジメントでは教材として重要事項をまとめた穴埋め形式のプリントを作成した。4年生のゼミでは、昨年のをバージョンアップした「卒論の書き方」を作成した。

#### ○自己評価

ゼミ活動として行ったバスツアー企画では、企業と連携するということ、そして、実際に販売するということから、学生は緊張感をもって真剣に取り組むことができ、非常に実践的な成長の機会になったと考える。ゼミ以外でもアクティブラーニング形式の授業では、聞くだけの講義にくらべ学生の主体的な取り組みを促すことができた。ただし、グループワークなどでは主体性に関し個人差が大きく、評価の仕方については課題が残る。

講義形式の授業においては、授業評価アンケートから学生へのこまめな発問や考えさせる工夫が学びにつながったということがわかり、意図通りの結果につながったと考える。

以上のことから、当初の計画を十分に達成することができたと考える。

## II 研究活動

#### ○研究課題

観光者のリスク認識等に関する研究

#### ○目標・計画

##### 【目標】

科研費の研究課題および担当授業の関連分野に関する研究を行う。

##### 【計画】

昨年度科研費で実施した海外調査に基づく論文を執筆する。ただし、昨年調査を補うために可能であれば夏季に追加調査を行う。その他、時間と予算の許す限り各地を訪れ、オーバーツーリズムの状況など観光地の現状を自分の目で確かめ、机上ではない知識経験を得るよう努める。

#### ○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

- ・宮本佳範「観光者のリスク認識に関する考察－“限定的な意味領域”であることの表出－」『東邦学誌』第54巻第2号、pp.11-24、2025年。
- ・宮本佳範「オーバーツーリズムの諸問題と責任に関する考察－観光者の認識と責任の明確化に向けたタクソノミーの試み－」『東邦学誌』第51巻第1号、pp.1-13、2022年。
- ・宮本佳範「少数民族観光における観光者の問題行動に関する考察－山岳少数民族が暮らすサバでの調査から」『日本山岳文化学会論集』第17号、pp.27-36、2020年。（査読有）
- ・宮本佳範「問題ある観光を行う観光者の意識－ウルル（エアーズロック）登山最終年の事例から

ー」『東邦学誌』第48巻第2号、pp.17-32、2019年。

・宮本佳範「観光者管理と観光者倫理ーブータンの事例からー」『東邦学誌』第47巻第2号、pp.1-13、2018年。

(学会発表)

なし

(特許)

なし

(その他)

なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

科学研究費補助金(科研費)基盤研究C採択 研究代表者 課題番号(24K15525)期間:2024年

4月~2028年3月、研究課題名:観光者の問題行為としてのリスクテイキング行動に関する研究

○所属学会

観光学術学会 日本山岳文化学会

○自己評価

今年度は、科研費の研究課題の関連研究として、ポーランド・リトアニア・ドイツを訪れ、研究テーマであるリスク認識に関し、観光者への聞き取り調査を実施した。これは、昨年度インドネシアで実施した調査を補完するものであり、インドネシアでの調査とあわせて比較研究を行った。そして、論文にまとめ、本学紀要「東邦学誌」上で発表した。一方で、来年度の調査に向けた準備が若干おけている。

全体としては概ね計画通り研究をすすめることができたと考える。

### Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

拝命した入試委員長長の職責を果たす。

【計画】

今年度から入試委員長となったが、近年は入試委員ではなかったため、まずは入試委員会の業務を理解し、円滑な入試実施ができるよう努める。

○学内委員等

入試委員会

○自己評価

入試委員会は久しぶりで、かつ委員長を任されたことから当初は手探りの状況であった。ただし、前任者が非常に長かったこともあり、「誰でも入試委員長をできるようにする」ことを目標に、仕事の整理を心がけた。事務局の協力もあり、その点はうまくいったと考える。一方、複雑な入試区分等を十分把握することはできなかった。全体としては、概ね職責を果たすことができたと考える。

#### IV 社会貢献

##### ○目標・計画

###### 【目標】

自分の専門分野に関連する学外からの依頼等に応え、社会に貢献できるよう努める。

###### 【計画】

企業との連携活動等を推進するとともに、高大連携授業、出張講義などの大学以外大学以外の教育の場における教育機会があれば積極的に行っていく。また、公的機関やメディア等からの求めがあれば、可能な限り協力する。

##### ○学会活動等

特になし

##### ○地域連携・社会貢献等

ゼミで行ったバスツアーは春日井の企業など地元産業を応援する趣旨であり、その意味で社会貢献活動の一つだといえる。ツアーのなかに工場見学や生産現場見学を含め、また、地元の産物を食べることで、地域産業の応援につながったと考える。また、東邦高校の国際探求コースの生徒に対するアドバイスをを行った。

##### ○自己評価

社会貢献や地域連携に関しては、当初の目的をおおむね達成することができた。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

学生の相談等に対応する能力を向上させる。

#### VI 総括

今年度は、研究活動に力を入れたこともあり、海外調査を行い、論文にまとめ公表することができ、それなりの成果を挙げることができたと考える。大学運営（委員会業務）も新しく配属された委員会の委員長としてそれなりにこなすことができた。次年度以降はさらに委員会業務等の全体像を把握し、改善等に力を入れるようにしたい。社会貢献は自ら機会を見つけることも含め、努力していきたい。

以 上